

母になる

木村友祐

オワアーウ。オワアーウ。オワアーウ。……

居間からこちらの寝室のほうへ歩いてくる茶白ちやしろの声が聞こえた。玄関前の短い廊下を、伸びた爪の音をカチカチ立てて。今夜もか、というあきらめとともに、腹式で発声される耳障りな大声に、心臓がこわばる思いがする。

茶白の夜鳴きのせいで眠れないと訴えていた隣りの妻の気配をうかがう。夕飯のあと、野良猫だった茶白を家猫にしてほんとうによかったのか、ちよつとした口論になったのだった。毎晩十時すぎに帰り、休日も仕事を家に持ち帰るような日々が半年以上も続いている彼女にとって、家に帰っても茶白のせいでくつろげず、さらに眠れないという事態は、身を削がれるに等しい深刻なダメージだった。

妻はまだ寝息を立てていた。たまりかねて耳栓をして寝るようになったからかもしれない。彼女の足元で丸くなっている先住猫のクロスケのほうを見やると、その黒い影は動く気配はなかった。茶白が鳴くと、クロスケも苛々して威嚇しはじめる。そうなると茶白はさらに鳴いて

収拾がつかなくなるのだが、今のところクロスケも気づいてなさそうだった。

オワアーウ。オワアーウ。……

茶臼は寢室の入り口までやってきて、一瞬鳴きやむ。「茶臼、来おい」とちいさく声をかけても、茶臼はドアのカーテン越しに中をうかがい、尻込みして、また鳴き声を発しながら引き返していった。何が茶臼をそこまで緊張させるのか。少しすれば、また鳴きながらやって来るだろう。

寝返りをうち、居間のほうから聞こえてくる声に背を向ける。おれも明日は遠い現場に出向くため、早めに起きなければならなかった。たとえ起きてかまってあげたとしても、一度スイッチが入ってしまえば、茶臼の夜鳴きはまたくり返される。ずっと外で暮らしていて、ある日から急に家猫になったことの不可解さを、茶臼は鳴くことで埋め合わせようとしているのかもしれない。と、様々な理由を考えて理解したつもりでいても、オワアーウ。オワアーウ。とくり返される声に心がかき乱される。この世界に対する根本的な不安を訴えているようで、茶臼に寄り添うようにかまっているつもりのは、少し傷つく。眠ろうとつとめる意識の隅で、実家の母もこんなふうだったのかとふと思った。

二日前、八戸の実家にあるホンダの車をいらないかと母から電話があった。それはもう十五年以上乗っている古い車なのだが、廃車にするのを父が嫌がり、おれにゆずると言っているらしい。東京では生活するうえで車はなくても困らないし、車検代も駐車場を借りる金も払えない、だからいい。そう答えて一瞬で用件は済んだのだが、その後でおれの近況を聞いてき

た母に茶臼の夜鳴きでまいっていることを伝えると、「あんだもよく夜泣ぎしたつきゃ」と母は笑った。赤ん坊だったおれも茶臼と同じように泣いて母を困らせた。五十年前の一九七〇年の話だ。当然、おれにはそんな記憶はない。

オワアーウ。オワアーウ。オワアーウ。……

また鳴きながら近づいてくる。どこか回遊する夢遊病者のように、おそらくは本人も自覚しないまま自動的に鳴いているように思えた。その声を背中で聞きながら、妻とクロスケが起きてしまうのではないかと身をこわばらせていると、いつしかおれは、そのころの母になった。た。

エツ、エツ。……

隣りで寝かせていた赤ん坊が泣いた気がして、すぐさまおれは起き上がった。眠っていてもどこかで神経が張りつめているらしく、生後二週間の赤ん坊が泣けば、勝手に体が反応するようになっていて。おっぱいか、とおれの中の母の意識はそう感じている。産後すぐからそうだった。入院していた産婦人科の病院でも、赤ん坊のいる部屋は一部屋隔てた先にあったのに、泣いたと気がつくや即座に起きていつておっぱいをあげた。それを見た看護婦は「あれ、今泣いだからさ」と驚いていたのだった。

まだ夜ふけらしく、精米所の工場と接した家の寝室は、暗くひっそりした静寂に包まれていた。襖越しに隣りの部屋から聞こえる、夫のいびきの音以外は何も聞こえない。でも、さつき

たしかに泣いたはず。夫が「悠平」と名づけた男の赤ん坊——五十年前のおれだが——に顔を近づけると、寝息が聞こえなかった。まさか。戦慄が走り、あわてて赤ん坊に覆いかぶさるようにして口元に耳を近づける。すると、ごくかすかに空気がもれるような音が聞こえた。念のためにはばらく耳をそばだてていたが、規則正しく寝息はつづいている。泣きだすような気配はなかった。

ああ、気のせいだったかとホッと安堵し、それからぐったりとため息をついて横になった。疲労と眠気で頭の中が混濁しているように感じる。一時間ほど前にも同じように錯覚して起き上がっていた。一晩で何度これをくり返すのだろうと思うと気が遠くなる。少し眠らなければ。

エッ、エッ。……

また泣いた気がした。聞こえたと思った瞬間に飛び起きた。今度はほんとうに泣いていて、おれはまずおむつが濡れていないかをたしかめ、それから浴衣の胸をはだけて過去のおれに乳房をふくませた。おれの、というか当時は二十九歳である母の体から分泌された汁を、かつてのおれはごくごくと一心に飲んでい。そのときの母の感覚と感情が今のおれの中に流れこんでくる。意識は男のままのおれには、それはかつて感じたことも想像したこともない、不思議な感覚と感情だった。自分の体液をとおして、とくにかわいいとも思えない眼下の肉の塊のような生きものとひとつながりになったような感覚。全身に食い込む疲労を押しつけて、なおこみ上げてくる温かな慈しみ。……だけど、それを信じていいのかと思う自分もいる。そう感じ

るのは、おれの中にある母性神話を投影したからではないのか。

そこまで思ったことはおぼえていた。気がつくとおれは、浴衣の上にはおった丹前の中に赤ん坊を入れて両手で抱え、うろうろと寝室と居間の前の狭い廊下を行き来していた。

……おら、何やってんだべ。

そう母の意識はぼんやりと思う。しっとりした温もりに満ちた、ちいさな悠平が腕の中にある。長男の出産から六年もたつて、ようやく生まれた二人目の子ども。胎盤早期剝離で大量出血し、流産しかけながらかううじて生まれた子ども。家業の安泰と、自分の家を「家」らしくするために、夫がずっと待ち望んでいた二人目の息子。いわば二人目の長男ともいえるべき大切な息子を抱えて、なんの用事があるわけでもなく茫然と廊下と台所を行き来している。

……ああ、わがね。おら、おがしぐなつてら。

このままでは大変なことになると、ふいに恐ろしくなる。

翌日、悠平をおぶつて、母の母であるキネ——おれの祖母だが——と一緒にバスに乗り、いつも診てもらっている個人病院に行った。色白で皮膚の薄い中年の医者は、産後のウツだろう、疲れがたまっているのだろうから、これを飲んでゆっくり休んだほうがいいと言った。渡されたのは、気持ち鎮める薬だという赤い薄紙に入った粉薬だった。

帰りのバスの窓からは、道の両脇にどこまでも続く田んぼの広がりが見えていた。黄色く色づいて刈り入れを待つ稲穂が、みっしりと重たそうに揺れている。

「このあたりは、どやすんだべが」

と、のどかな風景に見とれているおれの心とは別に母が言った。母は、この年から政府がコメの減産へと舵を切った減反政策のことを案じているのだった。あと数日もすれば、農家が収穫して天日に干した粃米が続々と集まってくる。それをうちの精米所で玄米にしてカマスに詰め、等級をつけて倉庫に高く積み上げる「集荷」がはじまる。精米所や肥料・農薬販売を営む実家は、政府米を集める国指定の集荷業も請け負っていた。集荷がはじまると、近所の親戚や知り合いの男たちに人夫として働いてもらい、女たちは男たちの昼と夜の食事の用意に追われる。地元の浜でとれたイワシの塩漬けをたくさん焼いたり、焼いたイワシでとったダシにキャベツとネギと豆腐を入れ、味噌で味つけした「カヤギ」をつくったり。男たちは、六十キロもあるカマスを肩と背中に担いで倉庫に一つ一つ積み上げるといふ重労働をこなすから、大鍋ごと出したカヤギにみんな箸をのびし、驚くほどよく食べた。夜は刺身と酒でちよつとした宴会になる。この集荷は十月、十一月と二か月にもおよぶ大仕事で、一年の収入の大半がこれにかかっていた。だが、減反の影響は今後どう出てくるのか、出ないのか、母には判断がつきかねていた。

「辨作^{べんさく}あ、コメ食^かねえ人はいねんだがらつて、精米所はじめだづ」。物心ついたときには戦争で亡き人となっていた辨作が精米所をはじめた理由について、母はキネから度々そう聞かされていた。遺品も遺骨ももどらないまま辨作の戦死を告げられたあと、娘三人を食べさせるため、キネは絶望に耐えて精米所を引き継いだ。男まさりに働いて軌道にのせたところに、長女である母の婿養子としておれの父である冠三郎が入った。まだ現役で人夫に指示を出すキネ

と、口出しを嫌う冠三郎の折り合いは悪く、それがまた母の悩みの種になっていた。

「ちよつと前まで、国の人だちは、田んぼ増やせ増やせてへつてつたべ？^(言つて)それで農家の人だちは、ちやつこい田だの、三角の田だのば、国さ借金してわざわざ整えだのさ……^(とどの)」

黙つたままのキネに聞こえるように言葉を継ぐと、隣りに座つたキネは「わけがあんだべ」とつぶやいた。なんにでも感謝するキネらしく、国の方針に理解を示しているようだったが、「おらんどのご先祖さまは、ケガヅ^(肌繕)ですつと苦しんできて……、ようやくなんぼが、コメとれるようになったのさな」

稲穂が成熟していく夏に海から吹いてくる冷たい風、ヤマセに苦しめられる風土で暮らす自分たちのことをキネは言っているのだった。それを聞いた母は、かつてこの地方では、飢饉で食べるものがなくなつたために、草木の根はおろか、人肉まで食べたという記録があるといつかだれかに聞いたことを思いだしている。当時に比べれば寒さにつよい品種の稲を栽培しているはずだが、それでも冷害をもたらすヤマセや悪天候は今も毎年のようにあるのだった。コメ余りといわれても、ここいら一帯の秋の収穫は、天候に心を削るようにやきもきしたのちの、ようやく迎えた収穫なのだということを母はあらためて思う。

家に帰ると、ほどなく、夫の実家から義母がやつてきた。何か気になつて来てみたという。小柄な義母にはそういう直感が働くことがある。夫の家は四代前から村の神社の氏子代表をつとめていて、義母は毎日の神社の参拝や掃除を欠かしたことがなかった。神様に配膳する前に食事をとることは決してなく、村の大切な行事があるときには、四つ足の肉は口にしないとい

った精進的な生活を自分に課していた。そのせいかどうか、いつしか村人たちの困りごとを神様にうかがい、その答えを受け取るという不思議な能力を備えるようになったらしい。直径二十センチほどの石を神前に置き、持ち込まれた相談事を伝える。「この件につきまして、可だば軽く、否だば重たぐなつて、教えでけさい」と頭を深々と下げてお願いしていた。

病院で診てもらったことを伝えると、義母は自分の気がかりの理由はそこにあったかと納得したふうで、それからすぐさま、

「ヤイヤ、あんだ、そつたら薄着してだら、わがねがべ。ほれ、びちつと着込んで、すぐ床さ^へ入れ」

寝室に布団を敷き、追い立てるようにおれを寝かせると、風が入らないようにと布団の四隅をパンパンとはたたいた。悠平は義母とキネで様子を見守る、昼と夜の炊事もやるから、何も心配しなくていいと言う。

夫の母から寝て休めと言ってもらい、ここ連日ほとんど眠れなかった疲労のため、母はすぐにとろとろと深い眠りに落ちていく。悠平が泣けば結局自分がおっぱいをあげなければならないうという気がかりが浮かぶけれど、今だけは、その心配も手放してしまおうと思う。絶え間ない緊張がゆっくりほけていく心地よさ。こんな感覚は、いつ以来だろう。

深い水底の温かな暗がりに落ちていくようなまどろみに包まれ、おれの中の母の記憶は、初産のときにもこうして義母がやって来たことを思いだしていた。妊娠中毒症になりやすい体質なのか、やはりあのとときも出産を間近にひかえて入院しているときに大量出血した。パニック

になつて泣きべそをかいていたところに、胸騒ぎがしたと言つて義母が現れ、浴衣の股から太ももにかけて真つ赤な血で染めたこちらを見ておののいた。そして「いや、まさか、こつたらごどになつてらどは」とうめくなり、看護婦に向かつて「看護婦さん、どつかさ^{ほうぎ}箒はねがべが？」と聞いた。張りつめた顔で突拍子もないことを聞く義母に看護婦は驚き、「あるんども、一体なんさ使うんすか」と聞き返すと、義母はためらうことなく言つたのだった。

「おらほうの家^えさば、長居するお客^{きやく}さんに帰^けつてほしいどぎ、箒^{さか}ば逆さに立でで早く帰つてもらうつていうまじないがあんだ。だすけ、赤ん坊^{あか}さ早く外^{そと}さ出でもらうために、箒^{さか}がいる。早くつ」

そして義母は、あきれる看護婦にかまうことなく、借りた箒を逆さに立てて、仁王像のように脚を広げて病室の壁際に立つた。それは念の力で赤子を外に引つ張りだすようにも、出産を邪魔する魔を退散させようとしているようにも見えた。その鬼気迫る姿は、おびたらしい出血になすすべもなくおびえて病室に近寄れなかつたキネよりも、ずっと頼もしく見えたのだった。結果的にはそのまじないの効き目は現れず、はじめて身ごもつた子どもは産声を上げることなく流れてしまった。それでも、あるとき感じた安心感を、母は忘れることはなかつた。

今もまた、そのときと同じ安堵に包まれて眠りにつく母の意識の隣りで、おれの意識も温かくとろけていく。このまま眠れるという確信を感じつつ、一方では別のことをうつすら考えていた。この義母の手厚い見守りは、じつは、息子たちの中でもとりわけかわいがつたという冠三郎の「家」のためにそうするのだろうか。また、子を産む母の体は、母自身のものという

より、「家」のものとみなされていたのだろうか。

あるいは――。ここから先は男のおれは想像するしかないのだが、義母にとっては、そんな「家」のことなど微塵も頭にはなかったのかもしれない。ひとえに家族となった嫁のため、孫のために夢中になって忿怒の仁王にもなるという、母親としての、また女としての常識にもとづいてそうしただけだったのかもしれない。だからこそ、母の心はこんなにもくつろいでいるのではないか。

女たちの、さらにいえば、生きものとしての安心感……。

それからおれは、おれのというか母の産後の黒ずんだ乳首に吸いついておっぱいを飲んでいたら、五十年前のおれの姿を思い浮かべていた。おれがそのとき飲んでいたのは、もしかしたら、母乳という栄養とともに、この世界にいてもいいのだ、自分はこの世界に歓迎されているのだという安心感だったのかもしれない。

めざめると、おれの脇腹に体をびったりくっつけて茶臼が寝ていた。おれがそっと体を起こしても、茶臼は少し頭をもたげただけで、起き上がる気配はなかった。一緒に寝てくれたことにひとまずホッとする。

茶臼の額に口をつけて、その背中をなでる。クロスケよりは太い毛筋と、上下する背中動きを感じながら、茶臼に呼びかけている。茶臼。この世界は、お前にとって安心できるものになっているか……？

夢の余韻のせいか、そういえばと思います。減反政策がはじまってから五十年、食べ物をつくる農業者に誇りある地位を与えることもなく、労働量とその価値に見合った収入が得られるようにする仕組みも考えてこなかった農政のもとで、着実に地元のコメ農家は衰退した。先日の母の話によれば、高齢化と跡継ぎがいなかったために農家をやめる者が増えるばかりで、おれの兄が継いだ実家の精米所も廃業するかどうかを検討しはじめたらしい。

茶白を起さないように布団から抜けて、台所に行つてヤカンを火にかけた。居間のテレビをつけると、なんの番組か知らないが、去年行われた新天皇即位の儀式の映像を流していた。それは確実に、この国の歴史の年表に大きく刻まれた出来事だった。そう頭ではわかっていても、なぜこんなにもその光景が空々しく見えるのかと、思わず立ったまま眺めている。国の為政者やマスコミが仰々しくつくりだす「歴史」。そこには、夢で見たような母たちの出来事も、妻やおれの出来事も、茶白やクロスケの出来事も記されることは一切なかった。

新天皇が即位を宣言する映像が終わると、いきなり、燕尾服を着た首相が「天皇陛下、バンザイ！」と戦時中さながらに万歳三唱する映像に切りかわった。首相の「バンザイ！」に続いて、周囲にいる男たちが野太い声で「バンザイ！」と一斉に唱和する。断ち切るようにテレビを消した。

ふと足元に気配を感じて、見ると、起きてきたクロスケがまだ眠そうにして下から見上げていた。その額をなでていると、茶白もそつと居間に入ってきた。「おはよ、茶白」と声をかけると、茶白はめずらしくちいさく鳴いて応えた。寝室から布団をたたむ音が聞こえてくるか

ら、妻ももう起きたのだろう。

おれは床からクロスケと茶臼のご飯皿を持ち上げ、こちらを見上げるふたりに向かって、「さあお前たち。ご飯食べよ」と言った。

(すばる 2020年1月号)

ばばちゃんの幽霊

朝吹真理子

夏がくると祖母の家に、家族ででかけた。祖母の家には、草庵風の茶室があった。母屋をでて、土階段をのぼっていったさきにそれは建っていた。台風で飛んでいってしまったような簡素な小屋で、実際に伊勢湾台風のときは半壊したと祖母が言っていた。茶室のむこうは裏山にづいていた。母屋の庭から、庭木のむこうに山があることがわかる。小高い、小さな山で、それがときどき音をたてる。裏山、とみんな呼んでいたけれど、その山には名前がなかった。地図には正式な名前が書いてあるのかもしれないが、よくしらない。ただ草木がこんもり茂っているだけの山。たいした山ではないから、誰も手をつけない。狸やイタチが、ときどき、庭におりてくる。バーベキューをした日の翌朝には、土に動物の足跡がつく。庭と裏山の境には、いちおう鉄柵があった。山の方は危ないから行かないように言われていたけれど、藪蚊も多くて、いたずらをした子供でも、なかに入っていきたいとは思えなかった。地下足袋を履いた庭師が、のびてくる枝をおとしたり、草を刈っているときに、山の入り口を、そつとのぞいた。庭師が帰るとき、ひきちぎられたヤマカガシが数匹、葉っぱといっしょの袋につめられ

ていた。おとなしいヤマカガシにも毒があるから触ったりしてはいけない。母屋に白蛇がでたことがあったから、蛇だけは殺さぬようにと祖母が言っていたのに、もう祖母はいないから、蛇はちぎって捨てられる。

庭のすみには、ちいさな墓が何基もあったけれど、いったいなんの墓なのか、しらなかった。墓の前には、湯飲みがいつも置いてあった。さっき汲んできたような水だった。誰かが気が向いたときに水を差し替えているらしかった。

ときどき、母屋に泊まらず、茶室にお布団を敷いてもらって、ひとり眠った。家族と離れて、ひとつの家にひとりきりで眠るのが、大人になったような気がしていた。

ばちゃんのおばけがでるぞ、ときまってふたつ上の兄が言った。私を怖がらせようとするけれど、兄は、枕元の電気をつけていないと眠れないことをしっていた。

おふろ上がりに、母屋をでる。父か母かに付き添われて、土階段をのぼる。母屋の方をふりかえると、なかにいるひとたちが、よくみえる。煌々とあかりがともって影もなくひとがいて、みな、幽霊にみえる。奥で兄がいとことゲームをしている。あかるいことが逆に気味悪かった。大人が、強い酒をのみながら、眠りもせずに、話している。夜も更けず、朝もこないような気がして怖かった。手提灯で茶室に入って、あかりをつける。あかりをつけすぎるとどこもあいていないはずなのに、どこからか羽虫が入ってくる。

茶室は、風の通り道になっていて、いつも木立の音がしていた。木造の簡素な茶室は、風がひとふきするだけで、おおきな音がする。がたがた揺れるのが怖いというよりもおかしかっ

た。祖母が亡くなって、お茶をするひともいなくなっていたから、遊びに行くたび、古びていった。玄関には、ぼろぼろのボードゲームやビニールプールが粗雑に置かれていた。縁側の床板は朽ち始めていて、床板のあいだに隙間ができている。隙間の多い、縁側によく腰掛けてみると、祖母が、近づいてきて、石榴を渡してくれた。石榴は庭木として植えていた。虫の這った石榴を祖母は拾って、もいで、ぎっしり詰まった赤い実を、一粒ずつ、つまんで、吸った。祖母の唾液のにおいが指からするのがいやだった。祖母は、政府に供出させられた、茶釜のことをたびたび言っていた。蚊帳の釣具まですべて供出せよ、と言われて、祖母は茶釜を土の中に隠したのに、祖母の妹が、掘り出した。こんないい茶釜まで供出して、隣組の寄り合いでも、立派だ立派だと褒められて、誇らしいじゃないか、そう祖母は家族に言われた。茶釜が銃弾になるなんてばかみたいな話だったけれど、みんなばかになるしかなかったから、率先してばかになった。祖母は、茶釜を首にかけて一緒に死んだ武将の名前を何度も口にしていた。そんなふうには死にたかつたわけでもなしに。祖母の家は田舎だったから、B29は遊びで弾を落とすことさえなかった。大きな空襲があったときに、空が燃えてる、といわれて、家族みんなで空のよくみえるところまで走って行くと、名古屋の方が燃えるのがよくみえた。ああ、よくえとるわ。みんなもえとる。もえた空がきれいだと思っただけで祖母もみんなも黙っていた。ひとごとだから毎晩よくねむった。あの茶釜も弾になったのだから勝つにきまっていた。そのころ、自分の未来の夫がインパールにいたなんて、知り得ないことだった。どこもかしこも真っ暗なはずなのに、名古屋の方角だけ、昼になったみたいにもみえた。朱色の雲が流れて

いた。空が明るくなるまで燃えているなんて、どう考えてもおそろしいことだけれど、もうよくわからなかった。

祖母と最後に会ったとき、母が私の七五三の写真をみせていた。乳母日傘のおひめさまみただと祖母が言って、着物が似合うのを喜んでいた。バレエ教室に通っていると何度も言っているのに、私の手を祖母は握って、ちゃちゃりこちゃーこと踊りやあすか、と節をつけて私の手のひらをあげさげた。祖母の部屋はアルコールと古い油脂のにおいがして好きじゃなかった。

茶室の縁側でうたた寝をしているとき、ばばちゃんが、私の名前を呼んだ。一服おあがんない。祖母の前にあった、黒楽茶碗が私には化石のようにみえていた。

このお碗は、箱のなかで、ながいあいだ眠っていたから、さいしょは、ゆっくり水をくぐらせるものなのと言った。目がさめるまで時間がかかる。触れたお茶碗は、なにも入っていないのに、ほのかにぬくかった。さっきまでお客さんにお薄をさしあげていたから、まだ、起きている。だから、一服おあがんない。長く眠っていたお碗に熱い湯をいきなりそいだら割れてしまうから、水をくぐらせて、だんだんあつたかいお湯にかえてゆく。もののいのちはひとよりいくらか長いから、だいに、起こさないといけない。祖母が茶筌をふる。茶釜から湯気がきりなくのぼる。湯気がいちばんのごちそうだと祖母はいつも言っていた。

おてまえ、ちようだいします。それだけは私も言えるのだった。子供の手でももてる大きさなのに、茶碗をのぞきこむと、お碗の底が異様にふかい。黒のなかで、薄緑が光っている。み

ていたよりも茶碗の底が深くて、ふつくらとした黒い穴がひろがっている。地厚なへりにくちびるがふれる。お薄をのもうとすると、お茶碗がさらに目の前に近づいて、黒が迫ってくる。

てのひらでたしかにふれているはずなのに、茶碗のなかに落ちそうだと思う。ぐらぐら、体が揺れてくる。茶碗を落としたら、怒られるから茶碗をしつかりささえようとすると、さらに黒が迫ってくる。このまま茶碗のなかに入ってしまうと思う。ばばちゃん。呼びかけようとする、体が茶碗のなかに落ちていた。ばばちゃん。声をだしているのかもわからなかった。落ちているのかのぼっているのかわからないまま昏黒のなかにいる。怖いかと思つたら、そうでもなかった。あたたかくて、湿った洞のなかにいるのだと思つた。ふかふかした靄につつまれて、遠くでなにかが光っている。裏山のタブやトチの木には、ヤマネやリスの眠る樹洞がある。そう庭師が教えてくれた。菌類が木の中を腐らせて誰かのねぐらになってゆく。湿つていて、あたたかくて、しばらくこのなかで眠つていたいと思つていた。眠つて百年経つひともいる、とばばちゃんが言った。起こされたのは夕暮れで、素振りにつかっているバットで兄に小突かれて起きた。縁側で眠っているだけで、ばばちゃんはいなかった。ばばちゃんはずいぶんまえからいないのだった。その晩から、私はひどい風邪をひいた。

茶室で眠ると、朝、雨音で起きるのがいちばん好きだった。障子越しの雨は、うつすらとした灰色をしていた。壁に雨滴の影が落ちて、布団のあたりまで、薄墨色がきりなく垂れてくる。墨汁が流れて体のなかに染み込んでくるようにみえていた。墨を磨る手伝いを一度だけしたことがあった。むかしから、病人とちいさな娘が磨るといいという言い方があるのだと言わ

れて、ちよつとやってごらん、と磨らされた。私が硯にこすりつけるようにして墨を持っていたからか、とりあげられるようにして終わった。

祖母は、なにかを書くよりも墨を磨りたいから書きものをしているように思えた。ゆつくり硯に水をおとす。硯の海に、自然に墨汁が流れてゆくように、すこしずつ、水を落として、時間をかけて磨る。墨は、白檀のにおいに混じって、生きもののようなにおいがするのが怖かった。生きものをしばってかためているのだと思っていた。祖母が、その墨で、誰かに手紙を書く。

永遠の永の字は、はらいもとめも必要な要素がすべて入っている。手習いのはじめの大切な字だから、いろは、のあとに、永遠の永、を練習する。書いてみてちようであ。半紙を折って、突然、永の字を書かされる。お手本もないまま、とにかく、永遠を思いだして、書きはじめる。永、永、永、永、永、つぶやきながら、一枚のなかに書いてみると、私が書いていたのは、氷という字だと怒られる。氷、氷、氷、氷、氷。え？ まさか、と思うけれど、たしかに氷にもみえる。最初から氷と書いていて、永遠の文字がひとつもなかった。一度氷になると、氷が紙の上に、かたまっていた。永遠もわからんのかね。そう言われるのが恥ずかしくて、わからないことをうまくいえなくて、泣いた。おぼえているのにいつの記憶かが思い出せない。永も氷も、いろはさえ、書けなかったころの思い出なのかもしれない。

茶室で眠るとき、竹の葉の擦れ合う音がだんだん水音にきこえてくる。川辺に舟を浮かべてひとりで流れている気がする。船頭さんを呼ぶまえに、まぶたが閉じているから、なにを思っ

ているのかもぜんぶ忘れて、すぐに寝てしまおう。

茶室は真夏でも明け方はひんやりしていた。トイレがなかったから、母屋まで歩いていって用を足さねばならなかった。ねむたいことを理由にして、いつも、庭先で用を足していた。パジャマの下を脱いでから、庭先にでる。誰もみていないから、裸足で、苔がふかふかのところにおしっこをしようとおもうのだけれど、いつも、あとで叱られるのがこわくて、はじっこで用を足す。星がうるさいくらいにみえる。夏の大三角くらいいしからないけれど、それがよくみえた。月が明るい、ということのを苔がしっとり露にぬれているのをみて思う。たまに尻に下草がふれるのがくすぐったかった。用をたしているあいだ、ほー、とながくつづくため息が、じぶんのくちからのぼる。ほー。ただ、尿を出しているだけなのに、そのまま宙に浮いてしまいうさそうだった。空に浮かんでいるはずが気づけば、また茶碗のなかに落ちてゆきそうだとと思う。ほー。尿がでるように魂も一緒に流れ出て土にしてみても、どこかにいつてしまいうさそう。土を濡らしていると、尿がはねて、足をあたたく濡らしてしまう。太ももまで濡らすこともあった。じぶんの尿があたたくいことが、なぜかかかった。しとを終えて茶室に戻ると、足や手を、竹のすのこが敷かれた水屋で、軽く洗う。おしっこをおえると、目を開けるのがやつとなくらいに眠いから、ズボンをはき直すのも億劫で、布団にもどる。足を洗うのが下手だから、指の間や踵に土がついたまま眠る。朝が来て、布団をたたむとシーツが少し汚れて、土のおいがしていた。

(新潮 2020年6月号)

斧語り

松田青子

斧は雨の日に買われた。

斧の体をふいに持ち上げたのは、ゆったりとした足取りで近づいてきた客だった。背の高い、がっちりとした体格の男は、斧の柄の感触をぱんぱんと何度か軽く両手で持ち替えるようにして確かめると、最後に一度ぎゅっと握った。斧の柄はがちつとして、太いほうだったが、その男の手に斧はすんなりと収まった。

男は斧を握ったまま、ハリをとうに失い色あせた開襟シャツを着た店主に声をかけた。小さな金物屋は店主のシャツと同じように全体的に色あせて見え、店主はいつも退屈していた。

紙幣と小銭が行き来した。斧はこれまで他の客に値踏みされたことはあったが、なぜだかいつも決まらなかった。この日は、男の大きな手のひらに収まった瞬間、決まるかもしれない予感があった。そしてその通りになった。何事にも相性があるのだと、斧はこの時知った。

男は茶色の紙袋でぞんざいに巻かれた斧をかばうように脇の下に抱えると、小雨の中、傘もささずに走った。ごわごわした紙袋に濃い水玉模様がいくつもでき、男のシャツとズボンも水

玉に染まった。思えばはじめから、斧と男はおそろいだった。

去年亡くなったぼくの祖父は、稲田貞一といって、三歳年上の「姉さん女房」である祖母、公子との間に子どもを四人つくった。

ぼくの母、絵美は末っ子で、唯一の女の子だったせいかな、息子たちには厳しかった祖父にかわいがられて育ち、上三人が坊主になんてなりたくないと言った寺を継がずにさっさと家を出ていったのはいいことに、成人しても家に居続け、婿養子をもらった。そしてぼく、薫が生まれた。

ぼくは母の上三人の兄たちと同じように、寺が嫌だったし、寺を継ぐなんてもつと嫌だった。檀家さんたちが当たり前みたいになんかの家にあがってお茶を飲んでいる日常、町中の人に知られていて見張られている気分になる日常、これじゃプライバシーなんてあったもんじゃなし、ずっとぼくにはぼくだけの家がないと感じていた。

だから、高校を卒業すると、東京の専門学校に願書を出して、さっさと家を出た。

母は悲しんだけど、田舎の寺に息子を押し込めるのもかわいそうだし、薫は今時の子だし、私だって昔は東京に行ってみたくらいと思っただけがある、とふわわとしたいつかの夢を少し潤んだ目をして語り、ぼくの願いを受け入れてくれた。父の光雄は祖父があまりにも健勝なせいであまりに寺の二番手に甘んじていたから、とりあえずまあ、いいんじゃないかと言った。坊さんなんて、後でいくらでもなれる。

祖父は、生前、一本の斧を大切にしていた。

その日の法事や檀家まわりが終わると、祖父は黒の埃くさいホンダのタイヤをぎゅうぎゅういわせながら、寺の裏道である、舗装されていない砂利だらけの急な坂を上り、ぼくたちの寺に戻ってきた。

寺の正面には石段があり、参拝人やぼくの家族は基本的にこっちの階段を使っていた。ぼくが小学校低学年だった頃、父は炎とかがペイントされたダサイデザインのモトクロスバイクにはまっていて、ある時嫌がるぼくを後ろに乗せると、バイクで石段を駆け下りた。

十秒にも満たない時間だったけれど、その十秒は長くて、恐ろしくて、息ができなくて、下までたどり着き、自ら投げ出されるようにバイクから解放されたぼくは、父を馬鹿じゃないかと思いつながらめちやくちや泣いた。父は困ったような顔をしていた。

そして、そんな二人の様子を、石段の脇に建つトタン屋根の民家に住んでいた一つ上のちひろちゃんが、二階のベランダに寄りかかって退屈そうに見ていた。膝上のスカートからのびる脚がすごく細かった。

帰ってきた祖父は、奥の自室で袈裟を脱ぎ、ランニングシャツとズボンに着替えると、祖母と母が適当に過ごしている台所や小さな居間に顔を出してから、寺の裏手にある空き地に向かい、夕飯までそこで薪割りをして過ごす。

斧はいつも、祖父が建てた薪小屋の中にあった。夜中、降ってきた雨や雪に斧が濡れてしまわないように、祖父は常に気をつけていた。そして、定期的に手入れをしていた。

寺は山の麓に位置していたから、木材はいくらでも手に入った。

とはいえ、住職である祖父は勝手に切り倒すようなことはなく、山の頂上をならして、子どものテーマパークを建設している建築業者の人たちから手頃な大きさの木をもらったり、テーマパークが完成した後もその人たちが、ほら、お上人に、とちよくちよく持ってきてくれるのがほとんどだった。

恐竜の模型とアスレチックの遊具がいくつか置かれた、今思えばしょぼいテーマパークだったけど、急な来客に備えて必ず誰か寺にいないではならないせいで、あまりいろんなところに遊びに連れていってもらえなかったのは、そのパークができるのを楽しみにしていたし、開園してからは、テーマパークのこんなに近くに住んでいるなんてすごいと、毎日飽きずに興奮していた。

パークの入り口にはお菓子が売られている売店があつて、母と祖母はこれにばかりに請われるままスーパードまでお菓子を買に行かなくて済むと喜んだ。でも、テーマパークは数年で寂れ、閉園し、売店は撤収され、後には恐竜の模型だけが残された。

祖父は斧を手にとると、その柄を満足そうにしばらく撫でさすり、少し離れて見ているのは、その持ち手がすべすべしていることを知っていた。祖父は滅多なことではよくに斧を触れさせなかったけれど、祖父が見ていない隙に何度か触れてみたことがある。なんで触れてみたかったのか、今思うとよくわからない。

大人が集う寺で退屈していた子どもの頃はよく時間を持て余し、木を割る祖父を見に行つた。そうじゃない時は、近所の子どもたちと墓地で鬼ごっこやかくれんぼをしたり、墓の脇か

ら生えているつくしやペンペンぐさを乱獲したりもした。

祖父は斧と木に向かっている間、ぼくが近くで見ていることも忘れていた。夏ならランニングシャツの前あたりが汗ばみ、冬なら祖父が好きなタバコの煙みたいに口から白い息が吐き出される。

祖父は木によって、力の込め方や斧の角度を調整しているようだった。でもぼくの目には、祖父は斧を握っているだけで、斧が自ら加減を調節しているように見えた。

そして、カン、コン、ポン。木が割れると、乾いた、見事な音がした。

見ていると、祖父と斧はまるで運命共同体みたいに、息がぴったりで、横でぼかんとしているぼくなんかよりずっと強い絆で結ばれているようだった。

祖父が地道に薪を量産し続けるので、家の風呂はいつまで経っても焚きつけ式で、母と祖母は面倒だと陰でこぼしていた。でも、祖父には他に趣味もなかったから、黙認しているみたいだった。

小学校高学年の頃、ぼくはなぜか祖父に「手伝いたい」と甘えた声を出した。なぜだったか覚えていないけど、その日はいつものような丸太状の木ではなく、細長い木材を祖父が割っていて、それなら自分でも何かできる余地があるように思ったのだと思う。

たぶん、放課後は友だちと遊ぶことが増えたせいで、祖父の薪づくりを見守ることも少なくなって罪悪感があつたのかもしれない。祖父自体はぼくがいようがいまいが関係なかったに違いないのに。

ぼくの言葉に祖父は一瞬当惑した表情を見せたが、それからすぐにその表情を引っ込め、「よし、そうか、やってみるか」と、まるでシチューのCMに出てくる大草原のお父さん、みたいな大らかさをなんとか取り繕った。祖父は無口で、神経質なタイプだった。

ここを押さえているようにと、祖父はセメントブロックの上に渡した木の端に、頼りないぼくの手を誘導した。そこならば安全だと思ったのだろう。賢明な判断だった。でも、ぼくは賢明な子どもではなかった。

タイミング悪く、一匹の蝶がぼくと祖父と斧の間にひらひらと現れた。銀色と黒のきれいな蝶だった。ぼくが反射的に蝶に手を伸ばした瞬間、祖父が斧を振り下ろした。

自分の中から、父のバイクの時なんか目じゃない音量の泣き声が出てきた。

母に切るように言われていたのに生返事で伸ばしっぱなしだった爪の端が斧の刃に触れただけなのに、ぼくはあの時鋭い痛みを確かに感じた。あらん限りの情熱を込めてぼくは叫び続け、しばらくして母が空き地に走り込んできて、その後に祖母も続き、斧を右手につかんだ祖父は終始困ったような表情をしていた。そしてぼくは母と祖母に、祖父が空き地にいる間は近寄ることを禁じられた。

だから、祖父の遺書に、孫の薫に斧を譲ると書いてあると知って、ぼくは普通に戸惑った。

これは一体なんの冗談だろうと、斧は思った。

見知らぬ部屋はあの空き地よりもずっと狭く、薫とかいう幼い頃から軟弱な孫は、斧をさっ

さと部屋の端に立てかけた。その手つきはぞんざいで、雨風にさらされないようにと、斧をいたわるように毎日小屋に片付けてから母屋に戻っていった、貞一の優しいそれとは雲泥の差だった。

「もー、いらないうっていったじゃん、なんで勝手に送ってくるの。やめてよ、ワンルールの部屋に収納なんかないも同然なのに！」

しばらくすると、薫の抗議する声が部屋を満たした。沈黙の後、
「ラインで済まさずに電話しただけでもえらいでしょ」

薫は冷たい声で言う、通話を終え、スマートフォンをベッドの上に放り出した。ここでは斧は厄介者だった。

一時間ぐらい経った頃だろうか、玄関のドアがガチャガチャと音を立てはじめ、開いた。

電話の後ずっと、腹ばいの姿勢で、ベッドの上でスマートフォンをいじっていた薫は、途端にベッドから起き上がると、笑みを浮かべてしまいそうになるのをなんとか押し込めようとしているらしい、なんとも言い難い表情で、狭いというより細い玄関に向かった。

「ただいま」

薫よりもちょっと低い声がして、ぱっと見た瞬間、薫が二人いると錯覚しそうになるくらい、薫によく似た背格好の青年が部屋に入ってきた。前髪を六四で分けた髪型までそっくりだが、間違い探しのように分け目は逆だった。

「思ってたより早かったね」

薫の声は、さっきの電話が嘘のようにはずんでいる。

「うん、研修早めに終わったから。駅前で松屋の牛めし買ってきた。食べよ」

「すごい。牛丼食べたいと思ってた」

青年はガシャガシャと音を立ててビニール袋から牛丼を二つ取り出すと、必要十分という言葉が浮かぶ大きさの白い楕円形のテーブルの上に並べ、薫は玄関を入れてすぐの小さな台所から箸を二膳持ってきたが、あ、そうか、割り箸ついてるね、でも割り箸のほう取ったどうか、何かの時のために、ピクニックとか、ピクニック行きたいね、などと独り言のように早口で言いながら、箸をそれぞれの牛丼の前に添えた。青年の箸が置かれた向きから、彼が左利きであることがわかった。

あぐらをかいた二人は早速箸を手にとると、いただきますと同時に、旺盛な食欲を見せ、勢いよく牛肉と白米を口に運びはじめた。

「おいしいね」

「うん、おいしいね」

「牛丼って、忘れた頃に食べるとほんとおいしいよね」

「でも、毎日食べても意外とおいしいよね」

「確かに」

斧は部屋の隅っこから、牛丼をががつと食べる青年二人をぼんやりと見ていた。斧は貞一が食事するところを、そういうええ見たことがない。

その日のうちに、もう一人の青年の名前が祐樹であることがわかった。薫に「ゆうくん」と呼ばれている彼は、薫と同じく美容師の卵で、二人は専門学校で出会い、今は別々の美容室に勤務している。付き合いはじめたのは半年前だ。

数日経つと、双子のように見えた二人も、顔の特徴の違いがわかるようになってきた。本来そんなに似ていない顔立ちの二人は、流行りの髪型や服装のせいで雰囲気似通って見えた。髪の色も飴玉みたいにころころ変わった。夏は白いランニングシャツ、冬になると毎年同じワークジャケットを羽織っていた貞一しか知らない斧には、若い彼らはまったく違う惑星の生き物だった。

二人を見ていると、坊主の貞一の、バリカンで剃り上げる直前の、数ミリほど生えてきた髪が総白髪になり、髭も白くなり、肌には皺が刻まれ、少しずつ筋肉が失われていったことを思い出し、斧はさみしくなった。貞一が丁寧に使ってくれたおかげで、斧はまだまだ現役といつてよかった。貞一の汗と手の脂が長年染み込んだ持ち手も、深い、いい色に変化している。

駆け出しの若い二人は裕福ではなかったが、服やアクセサリを貸し借りし、決して楽ではない業界でやっていこうと互いを支え合って暮らしているようだった。かわいいマグカップを買ってきては、かわいいね、と言ひ合ひ、狭い部屋を飾りつけ、斧が聴いたこともないようなちやかちやかと音が多い音楽を流し（天気予報を知りたいからと言ひ訳しながらラジオを聴いていた貞一が、本当はクラシックを好きだったことを斧は知っている）、狭いベッドでくつつ

いて眠りにつく二人は、斧の目には目新しく映った。何しろ斧は、貞一しか知らなかったから。本来は薫を含め、貞一の家族たちも斧の周りで生活していたはずだが、貞一を自分のものだと思ひ込んでいた斧は、貞一の家族など、いないも同然だったのだ。

「相棒」

そう貞一は斧のことを呼んだ。「なあ、俺の相棒」と。それは世界で貞一と斧しか知らないことだった。

「ねえ、この前さ、牛井食べてたら、いきなり部屋に斧が立てかけてあるのが目に入って、ぼくがびっくりして牛井喉に詰まらせたじゃん」

「あー、うん、あったね、そんなこと」

薫と祐樹は瞬きも惜しむ真剣な表情で、二十四インチのテレビの液晶画面を見つめている。画面にはゾンビの大群がうようようとうごめいていて、二人がコントローラーで操っているハンターたちは迫り来るゾンビを斧でなぎ倒している。

「あん時、ぼく、薫に本気で殺されるかと思ったよ」

「あれはビビるよね、ごめん」

「連続殺人鬼かと思ったじゃん」

「実際、人は見かけによらないとかあるからね」

「脅かすのやめてよ」

二人はゾンビと闘いながら、軽口をたたき合い、そんな二人の会話がろくすっぽ耳に入って

こないほど、斧はテレビ画面に映し出されている光景に衝撃を受けていた。

画面の中で斧を振り回している、薫と祐樹と同じ人間たち。今やこんな風に斧を使うことができるのなら、現実の斧など無用の長物に過ぎないのではないか。テレビゲーム以外に、二人が斧を必要とすることは皆無だった。

すでもう、斧の時代は終わっていたのだ。貞一がこの世からいなくなり、斧の居場所もなくなったのだ。電話をかけていた時の薫の冷たい声も、今なら理解できた。

斧はこのまま、ベッドの下（仮に喧嘩でもして頭にカッと血が上ったりしたら危ないから、と二人がここに移動した。ビニール袋で斧の刃の部分をぐるぐる巻きにした後で）に放置され続けることになっても致し方ないと、自分が置かれた状況を受け入れることにした。貞一が斧でもきつとそうしたことだろう。

「うわ、ベランダの棚、カビてるよ！」

不規則な休日が重なった木曜日、洗濯物を干しにベランダに出ていた祐樹が大きな声を出した。

「え、うそ」

一つしかないコンロで焼きそばを炒めていた薫は火を止めて、数年前に買い今ではベランダ用になっているピーサンをいつものように靴下をはいたままつかけると、外に出た。

一緒に住みはじめた時、もともと薫が住んでいた部屋に祐樹が荷物を運び込んだのだが、祐

樹の無印良品の棚のほうが、薫のリサイクルショップで手に入れた数千円の化粧板の棚よりも明らかに見栄えがよかったので、薫の棚は処分することにしたものの、邪魔だから一旦ベランダに出したところ、そのまま日が経ってしまった。

かつては白かった棚は悲惨なことになっていた。ひさしのないベランダにカバーもつけずに数ヵ月以上出しっぱなしにしていたせいで、棚板はところどころ不恰好にたわみ、全体的にカビでいて、黒い色調の迷彩柄で覆われていた。

「やば」

薫は一目見て、呆氣にとられた。

「なんで気がつかなかったんだらう。洗濯物干したり取り込む時に、何度もベランダに出てたのに」

「最近二人とも忙しくて、余裕なかったじゃん」

洗濯物を干し終えた祐樹が薫のすぐ横に来て言う。

「確かに」

盛大にカビている棚を凝視したままで、二人は話し合った。

「いい加減粗大ゴミに出さない」と

薫が諦めた調子で言うのと、

「てか、こんなひどい状態の出していいのかな」

祐樹が参ったね、と息を吐きながら言い、

「そうだ、棚を解体してゴミ収集用のビニール袋に納まるようにしたら、燃えるゴミでいけるんじゃない。うちの区、たぶん大丈夫だったよ」

とちよつと明るい声で続けた。

「そんなことできるの？ でも、うん、粗大ゴミは出す時連絡しないといけないし、なんかシル買わなきゃいけないし、面倒だからそれもいいかもね。ホームセンターでノコギリ買ってこないと」

そう薫が言うと、

「うちには立派な斧があるじゃん」

祐樹は肝心なもの忘れてるんだからと、にやりとした。

つくりかけだった焼きそばを食べた後、二人はもう一度、ベランダに出た。下に何か敷いたほうがいいだろうと考え、以前共通の友人たちと花見をした際に買った百円ショップのビニールシートと斧を携えて。カビ対策に、髪を染める時のグローブをつけた。

かろうじて持っていたプラスチックドライバーで棚の要所要所に留められたネジを外すと、すでにやわやわになった木材の小さな束ができた。

薫の細い手につかまれた最初、斧は本意だった。なにしろ薫は、斧の刃が爪の先をかすっただけで狂ったように、大げさに泣きわめいたのだ。そんなやつに、斧を使う資格はなかった。貞一の大きな分厚い手の感触、季節によって貞一がはめていた軍手や革の手袋の感触、そ

れだけ覚えていたかった。

しかも、なんだこの薄汚い板は。こんなものに自分を使われるなんて、斧には自分への冒瀆に思えた。

物干し竿を固定していた二つのブロックを左右に置くと、その上に板を置く。祐樹が板の片方を押さえ、薫がもう片方の端を足で踏むと、斧をふりかざした。狭いので、小さく。もともとぐにゃつとしていた板は、小気味よい音を立てることなく、二つにあっけなく分かれた。

「わ、すごい、きれいに割れた」

祐樹が褒めると、薫がまんざらでもない表情になる。

「ほくもやってみたい。次、ほくにやらせて」

すぐに交代したがった祐樹が今度は同じ動作を繰り返す。

「すごい」

「すごい、なんか木こりになった気分」

薫と祐樹は一回ごとに交代し、お互いを讃えあった。そして、意味がわからないほど楽しそうな二人に使われているうちに、斧はこれまで感じたことのない気持ちに襲われ、困惑した。

十枚もない板を割ってしまうと、棚の背面の一番大きく、しかし一番薄くて弱い板は斧を使うまでもなかった。まず真ん中で折って、二つに割ると、それをそれぞれがさらに二つに折った。すべてまとめて四十リットルの透明なゴミ袋二つに納めると、ベランダはすっきりと片付いた。二人は達成感でいっぱい、相変わらず楽しそうで、斧はそんな二人の間で、自分の感

情にまだ戸惑っていた。

その後、斧はまたベッドの下にしまわれ、出番がないまま過ごしていた。もうこれからは余生と考え、薫と枯樹の生活する音を聴きながら、ここでこうしているのも悪くないかと、斧がすっかり寛いだ気持ちになっていた頃、二人の声にある調子が混ざるようになったことに斧は気づいた。

それは怯えだった。

二人の部屋の外の世界では未知のウイルスが蔓延しはじめており、そのウイルスは人から人へと感染するらしい。斧の脳裏には、二人が一時期熱心にプレイしていたテレビゲームに出てくるゾンビの姿が浮かんだ。

守ってやる。

斧は思った。そして、あの棚を解体した日、二人に対して感じた気持ちは今、この瞬間の気持ちと同じであることに気づいた。

守ってやりたい。

ゾンビに襲われるかもしれないというのに、美容業界は自粛対象にならなかつたからと、二人は斧にはよくわからない会話を交わし、こわいね、不安だねと言いながらも、丸腰で毎日働きにいった。残された斧は、部屋で一日気を揉んで過ごした。

幸運にも、毎日二人はゾンビに噛まれることなく家に帰ってきた。思ったよりも、この二人

は強いのかもしれないと斧は思ったが、部屋に入ってくるマスクをした顔は相変わらず頼りなくて、とてもそんな風には見えなかった。

夜、二人がそれぞれ帰ってくるたびに、ドアはガチャンと音をたてた。もし三回目のガチャンが聞こえたら、それがきつと合図だ。テレビ画面の中で、ハンターを部屋まで追いつめ、襲いかかってくるゾンビの群れ。

守ってやる。絶対に守ってやる。

マスクを外し、頬に跡がついてるよと笑いあっている二人の声を聞きながら、斧はこの先に潜んでいるかもしれない危険の音に耳を澄ませた。

(群像 2020年8月号)

ダン吉の戦争

高橋源一郎

ここまでのあらすじ

昭和8年5月の、うららかに晴れ渡った、ある日のことでした。その少し前、2月にはコバヤシタキジという作家が、トッコの拷問で殺されました。「アカ」だったので自業自得だと思ふ人も多かったみたいです。同じ月にはドイツの国会議事堂で放火事件がありました。これも「アカ」の仕業とされました。つづく3月にはドイツの国会議事堂で放火事件がありました。これがめでたく始まり、その4日後に国際連盟脱退の詔書が發布されて、7月には京都帝大のタキガワという「アカ」の教授が罷免されました。こうやって、どんどん世の中が「明るく」なっていた頃のお話です。

さて、そんなある日、ボートに乗って釣りをしていたダン吉くんは、まるで魚がかからないので、うつらうつらとねむってしまいました。それだけではありません。いつもしっかりしている、ダン吉くんの仲良し、黒ねずみのカリ公までもがねむりこんでしまったのでした。そし

て……気がついたときには、ダン吉くんもカリ公も「やしの樹」が生い茂る南洋まで流れ着いていたのです。ずいぶん長く寝ていたというわけですね。最初は驚いたダン吉くんでしたが、さすがニッポン男児、そんなことでメソメソしたりはしません。最初にダン吉くんがやったのは、というか、最初にカリ公がアドヴァイスしたのは、武器を作ることでした。子どもだからといって、遊びのことを考えさせない。さすが、カリ公です。家庭教師というよりも、優れた軍師というべきではないでしょうか。カリ公はしげみに飛びこんで、たまたま落ちていた棒と植物のつるをひろい、ダン吉くんにわたし、弓をつくるようにしました。この、「そこらへんに転がっているものを使って、即興的に、なにか役に立つものを作る」やり方は、確かに、レヴィリストロースのいう「ブリコラージュ」的思考にも似ています。けれども、カリ公の考えは、もっぱら、軍事優先なので、同じと考えるのは即断でしょうか。でも、放っておいて、棒をバットにしたり、つるで縄とびをしたりと、子どものようなことをしてはいけないと思ったのは、正しい判断かもしれませんね。もちろん、ダン吉くんは、カリ公のいうとおりにしました。要するに、カリ公は、絶対にさからうことのできないダン吉くんの「神」だったのです。

それから……いろいろなことがありました。そのうち、重要だと思われることだけをいくつか書いておくことにします。

ダン吉くんとカリ公は、その島の中をぐんぐん歩いてゆきました。いろいろな動物に会うことができました。ライオン、カバ、ゾウ、サイ、キリン、カメ、カメレオン、ナマケモノ、ゴ

リラ、ヒビ、ホッキョクグマ等々です。すごく豊かな動物相ですね。というか、面子の豊かさは動物園なみといっても過言ではありません。それから、当然かもしれませんが、その動物たちは、みんな人語を解することができました。ただ、カリ公とは異なり、おおむね、小学校2年生の男子程度の知能しかありません。ダン吉くんは4年生か5年生程度（男子です）といったところで、ちょうど釣り合いがとれていると思います。とにかく、この程度の知的レベルなら、なんとか、平和裡に彼らを支配することができさるだろう。カリ公はそう思ったのでした。もちろん、人間にも出会いました。腰みのをつけた、この島の原住民たちです。ダン吉くんもカリ公も、彼らを「黒ん坊」と呼びました。それが、当時のニッポンの習慣だったので、致し方ありません。というか、それでいいんじゃないか、と思うのですが、ダメなんでしょうか。とはいえ、ダン吉くんもカリ公も、それほど、この用語に執着しているわけでもないのです、これからは、現在のPCの基準に合わせて「黒い人」と呼ぶことにします。

ダン吉くんは、最初に会った「黒い人」のひとりから、王冠を奪ってかぶるようになりました。そして、この島を「ダン吉島」と名づけ、高らかに自らの領土と宣言したのです。こう書くとき、それは略奪、あるいは侵略ではないか、と心配される読者もいるかもしれませんが、大丈夫です。

当時のダン吉くんとカリ公の会話をここに採録しておきますね。

「ねえ、カリ公、平気かなあ」

「なにが心配なんですか、ダンちゃん」

「さっき、ぼくは、この島を『ダン吉島』と呼ぶことにして、同時に、この島の王さまであることを表明したんだけど、文句をいわれたりしないかなあ」

「なんの問題ありませんよ、ダンちゃん。この島は、いわゆる『無主の地』で、所有する国家のない土地なんです。さっき、ダンちゃんがやったのは、領有の意志をもって『占有』する『先占』にあたり、国際法で認められた領土取得のルールに則っています。安心してください。アメリカがインディアン……じゃない、ネイティヴ・アメリカンを相手にやったりして、先進国でスタンダードな考え方なんです」

「わかった。じゃあ、今日から、ぼくは王さまだ！」

そういうわけで、ダン吉くんは、「ダン吉島」の王さまということになりました。王さまであるダン吉くんが最初にやったのは、ニッパヤシの葉でおおった粗末な小屋を「王宮」と呼び、近くの平地に、日の丸の旗を立てたことでした。それから、何度も、不埒な外国人たちがやって来ては、「ダン吉島」を領有しようとして、「戦争」になりました。たいていの場合、外国人たち（アメリカ人やイギリス人が大半です。ドイツ人は、ダン吉くんたちがこの島を占有する前に、追放されてしまつて、もういませんでした。ぜんぶ、戦勝国が決めたことだったのです）が、戦闘行為の最初に行なうのが、「国旗を立てる」ことでした。

たとえば、こんなことがありました。外国の船員たち（もちろん白人）が上陸すると、「お

お、これはなかなかいい島じゃないか。領土にしようぜ」と口々にいいながら、近くのヤシの樹に国旗を結びつけました。アメリカ国旗にもイギリス国旗にも、見ようによつてはフランス国旗に見えなくもない、オリジナリティーにあふれた、いや、微妙な柄の国旗です。もちろん、どんな国のどんな国旗であろうと、ダン吉くんは許すことができます。憤怒にかられながら、彼らの前にとびだすと、こういいました。

「あなたたちは、どこからきたのです？　なんだってこの島にあがって、こんな旗をあげたのです？　ここは日の丸の旗のほかは、かつてに立ててはいけない場所です。すぐにひきおろさない」

一瞬驚いた船員たちでしたが、出てきたのが、腰みのをつけたアジア人の子どもだったのので、なんだよびつくりして損したぜとばかりニヤニヤ笑いだしました。

「オホ、これはなかなか気のつよい坊やだな。ここに国旗をあげて、なぜいけない？　ここはニッポンの島なのかね？」

「ニッポンの島ではないが、ぼくはニッポン人だ。そして、この島の王さまなのだ」

これは、なかなか、考えさせられる発言ではありませんか。もちろん、この「ニッポン人の王さまが統治する、ニッポンではない島」という考え方は、カリ公の発案でした。

ダン吉くんと上陸したとき、カリ公は、この島を実効支配して、ニッポンの領土とする予定

でした。そう進言すれば、ダン吉くんは、あっさりそのようにしたはずです。しかし、とカリ公は（内心で）考えました。

「そんな単純なことでもいいのだろうか。植民地経営が難しいのは世界史が教える通り。朝鮮半島でやっているような粗雑なやり方ではなく、ここは、民政長官としてゴトウシンペイが台湾でやったようなソフトな方式を採用すべきではないかな。あくまで、住民たちの自治を貫くという形式で、実質的に支配すればいいわけだし」

というわけで、ダン吉くん（実質的には、カリ公）は、欧米とは異なるやり方で、植民地経営をすることになったのでした。

最初に、ダン吉くんがやったのは、島の住民たちに名前をつけることでした。ずいぶん思い切った政策だとは思いませんか。激しい抵抗があることも考えられましたが、すんなりと、名前をつけることができました。

もともと、この島の住民たちは、「パン」とか「バナナ」とか「ヤシ」といった、自分たちが採集・狩猟する食物の名前を、自分たちにつけていたのです。その食物をとりこむことによって一体化しようという、ある種の宗教的な感覚からきた行為なのかもしれません。それを、ダン吉くん（カリ公）は、強引に変えてしまった。こともあろうに、「一号」「二号」「三号」というような、抽象的な名前にです。そればかりか、ですよ。ダン吉くんの目から見ると、どの「黒い人」も同じにしか見えない。なので、みんなに後ろを向いてもらって、その背中に、数字の「1」「2」「3」と書いていったわけです。要するに、黒板になってもらったのです。

いま、そんなことをやったら、さあ大変。イジメと批判される可能性も高い。そんな気がします。

これは、一見、ニッポンが朝鮮半島で行なった「創氏改名」によく似ています。朝鮮名を廃して、強制的に、ニッポン名に変更することです。このことが、歴史上、日韓の間に深いわだかまりを作ったことは、みなさんもご存じですね。

しかし、ダン吉＝カリ公が、「黒い人」たちに行なった改名は、それとはかなり異なっているのも事実です。そもそも、ダン吉くんが来島するまで、この島には、歴史というものがありませんでした。もう少し正確にいうと、「歴史」という概念がなかったのです。その理由は、暑かったからです。いや、ほんとに。暑くて、「歴史」というようなめんどくさいことを考える余裕がなかったのです。

そんな「黒い人」たちに、ダン吉くんたちは、「歴史」を与えた。まあ、「押しつけた」といわれれば、そうなんです。

「一号」「二号」「三号」ではなく「タケシ」「キヨシ」「アツシ」だったら、どうなのか。あるいは「キクノジョウ」とか「イソロク」とか「ゴンベイ」とか。「アリトモ」や「ヨリトモ」、いや、「マレスケ」とか。そういう名前の可能性だってあったわけです。しかし、ダン吉くんは、あえて「号数」にこだわった。ぎりぎり、「創氏改名」にはならない配慮をしたとも考えられます。しかし、同時に、この命名は「収容所」に入れられた人たちへの命名にも似ています。みなさんは、どう思われますか？

とはいえ、ダン吉くんの、「ダン吉島」統治政策は、その統治の全期間において、非抑圧的だった、ということは明言しておくべきでしょう。

島の住民たちへの命名の次に、ダン吉くんが行なったのは、（尋常）小学校をつくることでした。まずは、教育のインフラの整備から始めたのです。さすが、というしかありません。忘れていました！

この「ダン吉島」は、どこにあるのかということです。「南洋」としか伝えられてはいませんが、明らかに、「南洋庁」が置かれていたミクロネシアのどこかの島のはずです。それ以外の「南洋」については、ニッポンの統治の外にあつたし、情報もなかったし、当然のことながら、ニッポンからそちらへ漂流してゆく「海流」もなかったと考えるべきでしょう。このことの意味については、おいおい説明してゆく予定です。

さて、この「ダン吉小学校」の授業風景も興味深いものです。

校長のダン吉くんは、黒い小学生たち（ちなみに、最初の新生は全員おとなです）を集め、授業を始めました。最初は、もちろん、昭和のニッポンの小学校らしく、「ハト、マメ」と「黒板」たちの背中に書いてゆくことでした。しかし、この授業には根本的な欠陥がありました。背中に字を書かれると「黒板」たちがくすぐったがり、こう叫んでしまうことでした。

「無理、絶対無理！」

すると、ダン吉くんは、あっさり文字を教えることを断念しました。きわめて柔軟な考え方の持ち主だったのですね。教育に必要なのは、文字を教えたり、文章を読んで作者の意図を探ったり、漢字を覚えたりすることではない、とわかっていたのです。結局、最初の授業でやったことといえば、運動会を開催したことだけでした。それだけではありません。特筆すべきことは、「ダン吉小学校」では、教育勅語が朗読されることも、皇居の方角に向かって拝礼することもなかったことです。ことばについても、どうやら、ニッポン語とこの島の住民たちのオリジナルの言語をミックスして使っていたようです。このへんも、ゴトウシンペイの台湾統治に近い考え方ではないでしょうか。

教育制度の導入につづいて、ダン吉くんが行なったのは「貨幣制度」の導入でした。

その結果、「ダン吉島」では、「物々交換」から「商品経済」へと一気に飛躍することになりました。とはいっても、貨幣を作るのも大変です。なにしろ、「ダン吉島」には金属がないんですから！　そこで、ダン吉くんは、島の住民たちに石で貨幣を作るよう命じました。膨大な数の石製の20円、1円、50銭、10銭の貨幣が作られることになったのです。当然のことですが、これらの貨幣を製造したのは「ダン吉銀行」ということになります。

お金の準備ができると、島の住民たちを集めて、「貨幣制度導入に関する説明会」が開催されました。壇上に立った王さま、つまりダン吉くんは、こういいました。

「きょうから、この島も文明国なみに、お金で売買することにする、このお金を持っていけば、なんでもすきなものが買えるのである」

「すっげえー！」

「王さま、サンキュー！」

住民たちの歓喜の声をさえぎると、ダン吉くんはこうつぶやきました。

「そのために、まず、手始めに、みんなに20円ずつわたすつもりだ。これをもとに、みんなは商売をしたり、仕事をしたりしてもらいたい。そうしないで、ただ使ってばかりいると、お金はすぐに空っぽになってしまうので、注意するように」

「へえ、お金って、ありがたいようで、また、こわいものなんですネ」

すごいと思いませんか。わたしはこの会話を読んで衝撃を受けました。たぶん、ダン吉くんは、カリ公のいうとおりをやっているだけで、自分の発言に深い意味があることを知らなかったのかもしれない。だって、ダン吉くんは、ただ「貨幣制度」を導入しただけではなく、一緒に、「ベーシック・インカム」まで導入したのですよ！ ちなみに、小学校開設は昭和9年と思われるので、当時の1円が現在いくらにあたるのか考えてみましょう。森永卓郎監修『物価の文化史事典』（展望社、2008年）などを読んだ限りでは、およそ、1円＝現在の2500円で換算して、そんなにはずれてはいないと思います。とすると、ダン吉くんは、「ダン吉島」において、ひとりあたり、月額5万円の「ベーシック・インカム」を導入したことになります。近年、「ベーシック・インカム」導入実験がされたフィンランドでは、その額は、560ユーロ（約7万円）となっています。フィンランドと比較すると、社会規模も購買力も大

幅に劣る「ダン吉島」での月額5万円の「ベーシック・インカム」は、かなり高額なものともいえるかもしれません。その結果、「ダン吉島」の生活は目に見えて豊かになっていくのです。やるね、カリ公。

さて、次に「貨幣経済」がどのように、島の住民たちに浸透していったのかを見ていきましょう。ダン吉くんは、「ダン吉銀行」内に「貨幣製造部」をつくると、ただちに貨幣の生産にかかるよう命じました。なにしろ、貨幣などつくったことがなかったので、さあたいへん。「製造部」に配属された島民たちは、ダン吉くんから渡された「ニッポンの貨幣」のコピー写真を見ながら、彼らとしては限度を超えるほどの頑張りをみせて製造に励んだのでした。これがニッポンなら「昼夜兼行」、「撃ちてし止まん」、と寝る間も惜しんで労働するわけですが、「ダン吉島」では、そんなことはありません。一年中夏のような世界で、そんなに働いたら死んでしまう。それから、貨幣の精度だつてそうです。ニッポンの中小企業に勤務する熟練工のみなさんの能力たるや信じられないほどです。1万分の1ミリ以下の精度で研磨したパイプの表面の凹凸の検査を指でできる。人間国宝といつても過言ではありませんね。それに比べると、「ダン吉島」の「職人」たちの基本的姿勢は「だいたい」でした。いちばん大きな20円貨幣は直径50センチほど、重さも5キロはありましたが、小さいものは直径40センチ以下のものもあれば、中には重さが3キロもないものだつてある。なにひとつ同じ貨幣はありません。中には、面白がつて、貨幣に自分の名前や愛称やガールフレンドの肖像を彫る不心得者までいま

した。最初から、「中央銀行」で「貨幣」の偽造が行なわれていたのです。

「貨幣」の誕生によって、「ダン吉島」には商品経済が生まれました。住民たちは、貨幣をもとでにして、新しい商売を始め、たちまち、島のメインストリートには商店が並びました。挿絵を見ると「下駄や」「とりたて魚」「島の名物料理・テイクアウトもうけたまわります」といった看板もあるようです。けれど、残念なことに、貨幣経済は根つきませんでした。彼らは、毎日のように商売にはげみ、売り上げをせせと「銀行」に「貯金」しました。10銭、50銭がたまると、1円や20円に「銀行」で換えてもらう。けれども、ある程度、20円がたまると、みんな全額をおろしてしまったのです。いったいどういうことだろう。不思議に思ったダン吉くんが、彼らのあとをつけてみました。すると、彼らは、手に入れた20円貨幣の真ん中に開いた穴に棒を通して「車輪」の代わりにすると、その上に木の箱を載せてヒョウに引かせたり、そのまま、健康のためにバーベル代わりに使ったりしていたのです。実物から貨幣へ、そして貨幣からまた実物へ。マルクスもびっくりするような現実です。カリ公はしみじみいました。

「今回の件では、ぼくもちょっと反省しましたよ、ダンちゃん」

「へえ、そうなの？」

「はい。ぼくは、この島の経済的發展を願って、貨幣制度を導入しました。でも、ダンちゃんが最初に『なんでもすきな物が買えるのである』っていったとき、島民のひとり、『へえ、そんなおもしろいものをみんなにくれるんですか』って返事をしたのを覚えていますか」

「うん、覚えてる」

「あるとき、ぼくは、『やられたあ！』って思いましたよ。貨幣経済に対して『おもしろい』って反応できる感性がぼくにはありませんでしたよ。『役に立つ』とか『豊かになる』という発想ならあったんですけどね。なにしろ、貨幣が馬車……じゃない、ヒヨウ車になっちゃうんですからねえ。ふつうは、労働から貨幣へ、貨幣から金融へ、金融から投資へ、投資からヒヨウ車の生産へ、という過程をたどるわけなのに、彼らときたら、貨幣からダイレクトにヒヨウ車をつくってしまったわけですよ」

「そうか。確かに、カリ公のいうとおりだよねえ。ぼくたちと彼らとどっちが、高度な文明なのかわからなくなっちゃうね」

まさか、こんな話になるとは、わたしにも想像できませんでしたよ。さあ、教育制度・貨幣制度につづいて、ダン吉くんがとりくんだのは交通制度、もっとはつきりいうと、「鉄道」の敷設です。このこと自体は、植民地経営の常識ですね。

ダン吉くんは、カリ公と相談して、線路をしくことから始めました。まずは、島民たちと共に、飼い馴らしたゾウやスイギュウやサルを引き連れてジャングルへ向かいました。森林を伐採して線路にするためです。ジャングルに入ると、邪魔な樹は、力持ちのゾウさんがガンガン倒してゆきます。ゾウさんが倒した樹を今度はスイギュウが大きなツノでヨッコラショと片づける。スイギュウさんが片づけた樹をさらに、訓練されたおサルさんがノコギリでひく。おサルさんがつくった丸太を集めて最後に島民たちが2列にしきならべてゆくのです。いつの間に

か、「ダン吉島」では、人間と動物が渾然一体となった分業システムまで導入されていたのです。

「線路は幅をまちがえないように、よく気をつけて」

ダン吉くんは口をすっぱくしてこういいました。ちなみに、このとき、「ダン吉鉄道」で採用された線路の幅はおよそ1700ミリでした。ニッポンの鉄道線路が1067ミリといわれているので、標準軌はもちろん、広軌の代表である旧ソ連、スペイン、南米よりも幅が広いのです。このため「ダン吉島」でのダン吉くんたちの独自活動に、いつしか神経をとがらすようになっていたニッポン政府は、「ダン吉島」独立のシグナルではないかとも考えたようです。

でも、実際には、ダン吉くんたちが採用した、「ゾウ気機関車」を走らせるゾウさんたちの体の幅をもとに計測しただけだったのです。このことが後々、ダン吉くんたちを苦しめることになるのは、さすがのカリ公でも気がつかなかったのです。さて、線路の敷設が終わると、次は列車の製造です。最初から、エンジンにはゾウを使うことが決まっていました。なんといつでも、エネルギーは最強です。実際に列車をつくってみて驚いたのは、あの貨幣経済導入の際の貨幣製造技術が役に立ったことです。貨幣も車輪も、丸くて真ん中に穴が開いていることは同じです。大きさも大してかわらない。今度は石ではなく木を使うので、楽ちんだし、それに、丸くて穴が開いているものをつくる技術もすっかり洗練されていたのです。

ゾウ気機関車第一号の開通式は、「ダン吉島」始まって以来の祭典となりました。島中の人たちが着飾り……といたいところですが、そんな習慣はないので、みんな黒い肌をさらに輝

かしくするために黒い油を塗りこんで、見物に集まってきました。ブラック・イズ・ビューティフル。そんな彼らの思想を、ダン吉くんたちはもちろん許容していました。おそらく、ダン吉くんもカリ公も、「ダン吉島」で暮らすうちに、その土地の習俗に慣れ、受け入れていったのです。そういえば、もともとカリ公は、黒いネズミでしたね！ですから、黒いものに大して偏見もなかったのでしょう。島中の人たちがワクワクするうちに、線路の向こうから、機関車が客車を引っ張りながらノッシノッシとやってきました。なかなか大したものではありませんか。流線型の木製機関車の前には窓のようなものが開いて、そこから、ゾウが顔を出しています。ときどき、ゾウは鼻をかかげて「ブウォー！」と汽笛のような音をあげています。

「出発進行！」

ダン吉くんが声をかけると、それを合図に、「ゾウ気機関車」が発発しました。ゴロンコ、ゴロンコ、ゴロンコ……。

「ダン吉駅」から村を通り原っぱを抜けて、軽快に進んでゆく「ゾウ気機関車」。あらら、どうしたんでしょう。機関車が勝手に線路の外へ這い出してゆくではありませんか。なんだ、おいしそうなバナナを見つけたので、食べに行ったのです。

「食いしんぼうの機関車だなあ……」

双眼鏡で列車の様子を見ていたダン吉くんは、感心するようにいいました。怒っているわけでも、驚いたわけでもありません。

「自由な機関車だなあ」

「そうですねえ」

ダン吉くんの肩の上でカリ公もいました。それは、もしかしたら、ダン吉くんやカリ公が想像していたものとはちよつとちがった風景だったのかもしれませんが。それでもいいや。ダン吉くんはそう思いました。だって、こっちの方が楽しいんだもの。

もしかしたら、このとき、ダン吉くんは気づいたのかもしれない。最初のうち、ダン吉くんもカリ公も、この未開の島の連中を教化し、帝国臣民の一部にしようと思っていた。いや、そういうのはつきりした意識はなかったのかもしれない。漂流の果てに流れ着いた、その小島で、ふつうのニッポンの少年の無邪気な偏見をぶつけて、無邪気な侵略を行っていた。ただ、それだけだったのかもしれませんが。けれども、ひとつだけ、ダン吉くんには優れた資質があった。それは、なにごとにも真剣だった、ということです。

ダン吉くんは真剣に遊んだのです。すぐれた先生であるカリ公の下で。おとなであるダン吉くんが子どものような島民に文明の立派な文物を教えてやろう、そんなつもりで始めた「開発」や「植民」の「物語」だったのに、いつしか、それはもっと別のなにかに変わっていったのでした。

それから、ダン吉くんとカリ公は、「ダン吉島」に、新しいなにかをどんどん加えてゆきました。たとえば、「郵便局」をつくり、「郵便制度」を導入しました。ダン吉くんたちがつくったのは、世界でもっともラディカルな「郵便制度」といってもいいでしょう。なにしろ、送られるのはハガキや手紙ではなく人間だったのですから。というのも、「ダン吉島」の悩みの

一つは、雇用がなかなか生まれないことでした。そこで、カリ公は、雇用対策と「郵便制度」を結びつけ、手紙やハガキとして島民を雇うという革命的なアイデアを思いついたのです。手紙やハガキを出したいものは、郵便局に行きます。郵便局には、ハガキになるべく子どもが待っています。そのハガキとしての子どもの胸の部分に宛て名を書き、背中に通信文を書き、郵便局の横にある巨大なポストに投函します。島民たちがハガキを投函するたびに、ポストの中は子どもで埋まってゆく。「助けて、死ぬ！」そんな叫びが聞こえてくると、やおら、集配人が集め、各戸に配達にゆく、という仕掛けなのです。そういうわけで、もともとたくさん書きたいものは、手紙を買います。もちろん、手紙はおとなの仕事というわけです。郵便物として配達される子どもたち。もちろん、ただ、機械的に送られるわけではありません。なにしろ、生きた人間なんですから。ハガキなのに、お腹が空く。ハガキなのに、泣きたくなる。というのも、他のハガキに自分の背中に書かれた通信文を読んでもらって、実は、遠くの島に出稼ぎにいった兄さんの死亡通知だったとわかったからです。一通、一通に事件があった。というか、一枚のハガキが配達されるまで、すべてが冒険だったのです。

ダン吉くんたちが、沈没船から見つけた「野菜の種」をもとに、「ダン吉島」に「農業」を導入したのも大事件でした。なにもなかった土地を開墾し、農地にしようとしたのです。それまで、「ダン吉島」の島民たちは、ただ、そこらの樹になっているバナナやヤシの実をもらっていただけでした。ダン吉くんは、ありったけの農業の知識を、島民にさずけようと思いました。最初のうち、島民たちは、なんでそんな無駄なことをするのだろう、と不思議に思いまし

た。だって、なにもしなくても食べるものに不自由することはなかったのですからね。

「いや、もしかしたら、地球が寒冷化して、バナナもヤシの実もなくなるかもしれない。干ばつや火山の噴火や地震や津波だってあるかもしれない。そんなときのために、どのような条件でも食料を自給する体制をつくらなくてはならないよ」

そういつて、ダン吉くんたちは、懸命に「農業」を教えました。肥沃な土地に、南洋の太陽、そして、豊富な雨。ダン吉くんたちの予想を遥かに超える巨大な野菜を、ほんとうにたくさん収穫することができたのです。でも、それだけではありませんでした。「ダン吉島」の島民たちは、いつも、ダン吉くんたちの予想の「斜め上」をいつていました。だって、せっかく収穫したというのに、その野菜を食べたものなどひとりもいなかったのです！ ある島民は、スイカの皮でできた帽子をかぶって、こういいました。

「えっ、あれ、食べものだったのですか！ なにに使えばいいのかわからないので、赤いところはみんな捨てて、帽子にしちゃったんですけど」

また別の島民は、巨大なカボチャの皮でできた小さな風呂オケに水を入れ、子どもを遊ばせているところでした。もちろん、中身はくり抜いて、捨ててしまっていました。

「なにに使えばいいのかな、って思ってますね、これ、子ども用のオフロにちょうどいいんじゃないかな、って。いやあ、野菜っていうのは、柔らかくて、成形するのに楽なんですよ」

島内を見回り、野菜が自分たちの予期したものとは、まったく異なった使われ方をしている

のがわかったとき、ダン吉さんとカリ公は、思わず顔を見合わせました。

「まいったね」

「ほんとに」

「ガッカリした？」

「そんなことないでしょ、ダンちゃんも」

「ああ、なんだか爽快な気分なんだ。ぼくたちのちっぽけな親切心や、文明観がバカらしくなるよね。島民たちを見ていると」

「ええ、そうなんですよ。ぼくたちはずっといろんなことをみんなに教えていると思っているでしょ。でも、逆なのかもしれませんね。ぼくたちの方が教わっているんですよ。彼らの底知れない知恵にね」

それだけいうと、ダン吉さんとカリ公は黙りました。遠くの方から、島民たちの歌声が聞こえてきます。ふだん、ダン吉くんたちと会っているときには、「天にかわりて不義を討つ……」なんて、ニッポンの流行歌を歌ってくれるのですが、プライヴェートでは島に伝わる歌を歌っているのです。

「カリ公」

「なんですか、ダンちゃん」

「いや、なんでもない」

いつしか陽は落ち、南洋らしい、ダイナミックで色鮮やかな夕焼けが空全体をおおっていたのです。ふたりは立ちつくしたまま、その光景に見入っていたのです。そして、また、たくさんの方が起こったのです。

*

第三百十回 ダン吉の戦争（未完）

ダン吉くんは長い夢を見ていました。胸の奥のどこかに穴が開いて空気が洩れでてゆくような悲しい気持ちだったことだけは覚えています。

枕元でラジオから音が聞こえていました。

「J R A K、J R A K、こちらパラオ放送局。J R A K、J R A K、こちらパラオ放送局。7月18日、大本営発表。サイパンの皇軍、南雲最高指揮官以下在留邦人に至るまで全員戦死。大本営発表。サイパンの皇軍、南雲最高指揮官以下在留邦人に至るまで全員戦死。7月18日、大本営発表……」

ダン吉くんはラジオの音を小さくしました。どうしたものか、カリ公に相談しなきゃ、さう

思つて、しばらくすると、もうとつくにカリ公が戦死したことを思い出したのです。いかん、すっかり忘れていた。カリ公はもういないんだ。ダン吉くんが、島に上陸して、11年が過ぎていました。ダン吉くんはすっかり青年になっていましたが、青年らしい若さは、もうどこにもありませんでした。隠しきれない疲れが、いつも表情のどこかに浮かんでいたのです。

起きなければ……。でも、なんのために？　そう思うと、からだの上のタオルケットを払いのける気にもなれなかったのです。部屋の外から誰かの声が聞こえてきました。いまや数少なくなつた「ダン吉軍」の生き残り、「六号」の声でした。

「王さま！　王さま！　たいへんです」

「どうした？」

「海岸にアメリカ軍が上陸しはじめました。のらくろ少尉さまは、猛犬連隊を引き連れて、すでに出發されています」

「わかつた。すぐ行く」

ダン吉くんはそれでもしばらくベッドの上に横たわったままでした。行かねばならないことはわかっていました。それがどんな結果に終わろうと。そのときでした。ラジオから、聞いたことのない音が流れていたのです。それは……

(群像　2020年9月号)

ぶんがく
文学 2021

二〇二一年五月二四日 第一刷発行

編者——ほんがんげいかきようかい日本文藝家協会

©Nihon Bungeika Kyokai 2021. Printed in Japan

発行者——鈴木章一

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二—二—二二

郵便番号一—二—八〇〇—

電話——出版　〇三—五三九五—三五〇四

販売　〇三—五三九五—五八一七

業務　〇三—五三九五—三六一五



印刷所——豊国印刷株式会社

製本所——株式会社若林製本工場

本文データ制作——講談社デジタル製作

定価はカバーに表示してあります。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。なお、この本に付いてのお問い合わせは文芸第一出版部宛にお願いいたします。